

令和元年度 第1回図書館セミナーを開催しました！

令和元年9月24日(火) 医学図書館1階ブラウジングコーナーにて中根裕信先生(医学科解剖学)を講師に迎え、図書館セミナーを開催しました。今回のテーマは、『せつめい：医学的内容の説明方法 「臓器の観察」と解剖図—芸術家との関係』です。

中根先生は、医学的内容の「説明」は、命に関わるという点で、一般的な「説明」と異なると指摘しました。その上で、医療関係者と一般の方(患者)では、医学用語の認知や理解の程度にギャップがあることをクイズを交え紹介しました。実際に「患者に最も知られていない言葉はどれ？」¹(選択肢は①統合失調症、②HbA1c、③QOL、④インフォームドコンセント、⑤予後)では、参加者の予想は②HbA1cが最も多かったのに対し、③QOLが患者に最も知られていませんでした。先生は、日常で使っている言葉や絵図を活用し具体的に説明すると、患者にとってもわかりやすく、認識のずれが少なくなると話しました。

次に『「臓器の観察」と解剖図—芸術家との関係』の話題では、『解体新書』の元となった『ターヘル・アナトミア』の解剖図が江戸時代の日本の解剖図に比べ精巧であったことに触れました。なぜ西洋の解剖図はこれほど実物に近かったのか。先生は、理由として、西洋の解剖図では、遠近法や陰影を用いて立体的に描かれていることをあげました。また、ルネサンス時代の教会と芸術家(画家)の関係に遡り、画家が教会の壁画を描くために、人体解剖を許可されていた歴史を紹介しました。先生は、解剖学と教会絵画の繋がりとして、ミケランジェロが描いたシスティーナ礼拝堂の天井画の一部に大脳半球と脳幹が隠し絵として描かれていることを示唆する研究を紹介しました。

セミナー参加者の皆さんからは、「医者になって患者に説明する立場になったときに大切になることを学べた」「今まで、「なぜ人間の臓器を対象にしているのに、東洋と西洋でなんでこんなに図が違うのか」を疑問に思ったことがなかった」「『説明する』ことも、『スケッチを描く』ことも表現力が必要であり、医学以外にも様々なことを学んで、表現力をつけていきたいと思いました」等の感想をいただきました。



¹ 日経メディカル「会話力 vol.7 こんな「医学用語」が会話力を妨げる 医師の常識=患者の非常識!？」、<https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/search/cadetto/0902-t1/200907/511696.html>(2019年10月21日閲覧)